ヘルダーリーンにおける「犠牲」の問題（上）

谷　友　幸

Es hänget aber an Einem
Die Liebe. Diesesmal
Ist nemlich vom eigenen Herzen
Zu sehr gegangen der Gesang,
Gut machen will ich den Fehl
Wenn ich noch andere singe.

ヘルダーリーンは、"Der Einzige" (Erste Fassung) のなかで、このように歌つてゐる。ここで "Einer" と呼ばれているのは、いうまでもなく、キリストである。詩人は、いかなる神々にもましてキリストを愛したものの、そのひたむきな愛に驅られて、おのが心からとめどなく、歌が迸りすぎたことを歎いている。そうして、さらに新しく歌をうたいなおして、この誤ちを償おうと決意するのである。かくして、"Der Einzige" がさらに幾たびとなく繰りかえして歌われ、またかの "Patmos" の各稿が生まれるわけであるが、しかし、ヘルダーリーンのこうした態度は、ただこの "Der Einzige" の場合のみにとどまらないであろう。かれみずからも Die vaterländischen Gesänge と呼んでゐる、あのかずかずの詩篇、いや、ひろくかれの晩年の作品全體につ

いても、言えるのである。かれは晩年、いくつかの素材、いくつかの形式によつて、きわめて格調のたかい壯絶な歌をあまた歌つたが、それらが内容する根本詩想はすべて同一であつた。一八〇三年十二月、と言えば、すでにかれを最初の狂氣が見舞うたあとであり、しかもなお、さきの "Der Einzige" や "Patmos" が書かれたのちのことであつて、むろんかれの貴重な遺言のひとつとも考えられるのであるが、出版者ヴィルマンスに宛てて、"Übrigens sind Liebeslieder immer müder Flug, denn so weit sind wir noch immer, troz der Verschiedenheit der Stoffe; ein anders ist das hohe und reine Frohloken vaterländischer Gesänge. Das Phrophetische der Messiade und einiger Oden ist Ausnahme." と書いていることからも分るように、ヘルダーリーンは、ついぞ戀愛詩を書かなかつた。かれには、自身のきわめて個人的な體驗をそのまま文字に移す、さようなのどかな氣持など、微塵もなかつたと言つてよい。なるほど、かれは、ディオティーマに寄せて、幾たびか歌つた。しかしながら、それらの歌は、かれの個人的體驗が動機となつて歌い出されたものであつても、すでに歌そのもののなかでは、個人的體驗はあくまで止揚されて、ひろく愛という一般的な問題にまで高められているのである。たとえば、次の詩句を讀んでみたまえ。

Hingehn will ich. Vieleicht seh' ich in langer Zeit
Diotima! dich hier. Aber verbrutet ist
Dann das Wünschen und friedlich
Gleich den Seeligen, fremde gehn

Wir umher, ein Gespräch führet uns ab und auf,
Sinnend, zögernd, doch izt mahnt die Vergessenen
Hier die Stelle des Abschieds,
Es erwarmet ein Herz in uns,

戀愛は、ふたりの男女のあいだに、ひとつの神の存在を教える。現實からの逃避によつて得られた、この神の存在の意識は、ただ愛がふたりのあいだで終ることなく、ひろく時代の人間全般のあいだに實現されることを、詩人の心にきびしく要求しつつ、神々と人間たちとの疎隔を宥和するようにと、逆にふたりのあいだの關係を斷ち切るのである。ヘルダーリーンにとつて、戀愛はすなわち、ここに引用した詩の表題が示すように、別離であつた。事實、ズゼッテ・ゴンタート夫人との戀愛においても、かれは、すでに出會とともに、別離を先取しているのである。はげしく轉變してゆく時代は、かれに、いわゆる戀愛詩を許さなかつた。かれが、自身をとりまく時代の沒落を、ひしひしと胸に感ずれば感ずるほど、かれのうちなる詩人の使命にたいする自覺は、ますます激越なものと化したのである。かれは、一七九九年ホムブルクで作つた頌歌のなかで、いみじくも

Doch herrlicht mir dein Nahme das Lied; dein Fest
Augusta! durft' ich feiern; Beruf ist mirs,
Zu rühmen Höhers, darum gab die
Sprache der Gott und den Dank ins Herz mir.

O daß von diesem freudigen Tage mir
Auch meine Zeit beginne, daß endlich auch
Mir ein Gesang in deinen Hainen,
Edle! gedeihe, der deiner werth sei.
(Der Prinzessin August von Homburg)

と歌つているように、かれが讃頌するのは、"der Vater Gott"とか"die Götter"であり、"die Heroen"であり、"die Fürsten und Fürstinnen"（いうまでもなくこの語の最も本源的な、ヘルダーリーン的な意味での）であり、古代の"die Patriarchen und Propheten"であつた。自己の言語がほかでもなく神から授けられたものである以上、その言語を用いて歌うのは、すべてかような神々しい存在にたいする感謝であり、また神に見離された時代の運命にたいするやるかたない悲歎でなければならなかつたのである。かれは、この神から授かつた唯一の武器によつて、一刻もはやく、この現實世界のなかに、久遠の生命みなぎる平和を樹立しようとする。だからこそ、ここに引用した獻呈詩においてすらも、王女は、その高い身分によつて、崇められはしない。かの女の生誕日は、かの女のうちなる精神的な高貴ゆえに、祝福され、かの女の生命は、より高い神祕な力に關係づけられて、言わばひとつの神話領域に移されるのである。これこそ、從來の型を破つた、新しい獻呈詩と言わねばならぬ。もはやここでは、獻呈詩そのものの目的が、神話領域の稱揚というヘルダーリーン獨自の目的のための、たんなる動機と化しているのである。かくのごとく、かれの根本詩想は、いかなる詩においても、つね

に同じであつた。"Zu rühmen Höhers"—自己の使命をただこのひとつにかけて、かれは、歌つた。おのが歌のひびきにひとり耳を澄ましながら。そして、どこにもそれに和す聲が起らず、むなしくこだまがはね返るばかりであるのを知ると、おのが歌の拙さをはげしく感じて、かれは、さらにきびしくわが魂を鞭ろつように、また歌つた。こうして、かれは、生命のすべてを傾けて、聲をかぎりに歌いつずけたのである。ノーベルト・フォン・ヘリンクラートは、かつてゲーテとヘルダーリーンを比較して、ヘルダーリーンがいかにもすばらしくおのが貧困の豊かさをくりひろげてゆくのを見ると、僕らは、ゲーテにおいて、こよなく富める者の貧しさを歎きたくなりはしないかと、そんな意味のことを語つていた。(斷つておくが、この兩詩人は、生前ほんのわずかしか實際には接觸しなかつたけれども、相互の文學は、ふつうに考えられている以上に、本質的には近いのである。ヘルダーリーンが、同郷の先輩たる偉人な詩人シラーをことのほか敬慕していたことは、周知のところであるが、かれは、むしろ、いろいろな意味において、「ゲーテの子」であつた。シラーとの關係の破綻も、その精神的一因はここに求められるのである。)たしかに、このヘリンクラートの評言は、兩詩人の生立ちとその環境にたいしても、當欲るであろう。噴泉から迸り出る水柱は、物凄い勢とともに、天に沖するが、いかに神力をもつてしても、なごやかに波立つ廣やかな湖面の水を、一擧におなじ高さにまでは揚げることができない。うたがいもなくゲーテは、すべてに均衡のとれた、多面的な生命であつた。その人間的充實と燃燒が、どこか一面において、創造的形成的とならざるを得なかつたがために、かれは詩人となつたのである。かれの作品は、かれの人間的全存在のわずか一部にすぎなかつた。しかしながら、ゲーテのポリフォニーに比して、ヘルダーリーンはただひとつの壯大なメロディである。かれは——すくなくとも永年の逡巡であつた聖職放棄を決心し、詩人として生きる道を選んでからは——それこそかの悲劇"Empedokles"以後を指すのであるが——全存在が詩人であつた。

詩人であるよりほかに、かれの生活は、どこにもなかつた。あたかも花をひらき實をむすぶことが、土のなか暗くひそむ根の唯一の意義であるように、作品は、かれにとつて、かれの存在を生かす唯一つの意義にほかならなかつたのである。かれは、歌つた。全存在をかけて、ただひたむきに、ただひとつのことのみのために。

Doch uns gebührt es, unter Gottes Gewittern,
Ihr Dichter! mit entblößtem Haupte zu stehen,
Des Vaters Strahl, ihn selbst, mit eigner Hand
Zu fassen und dem Volk ins Lied
Gehüllt die himmlische Gaabe zu reichen.
(Wie wenn am Feiertage....)

ゲーテのように豊かな天分に恵まれぬヘルダーリーンは、――かれが驅使したごくわずかの、しかもごくありふれた語彙を見るがいい――乏しい素材をもちい、きわめて限られた形式をかりて、いままでいかなる詩人の口からも語られなかつた深い祕密を明かそうと、努めたのである。犯した「誤ち」にたいする自責の念に、たえず驅り立てられながら。かれの晩年の詩篇が、それぞれにいかに多くの草稿を費しているか、しかもなお未完の斷片のままに終つている作品のきわめて數多いことを思うとき、僕らは、かれの自責の念がいかばかりきびしいものであつたかを、推しはかることができよう。かれの文學にたいするひたむきな熱情、ついぞ精神の安住を知らぬこのはげしい自責の念こそ、貧しいヘルダーリーンが偉大にいたる道にほかならなかつた。これあるがために、

すでに頌歌において獨自の――クロプシュトックを凌駕する――みごとな作風を築きあげたのちでさえ、たゆまぬ詩作のかたわらで、ソフォクレスやピンダーの文學を一語一語と堅實に消化するに努め、かれの最晩年の讃歌のために、新しい生氣あふれる言語を創造できたのである。かれがソフォクレス譯の大部分を終えた一八〇一年以後において、とみに斷片の詩篇が數增しているのは、故なきことではない。それらの斷片がいかなるかたちを示しているか、見るがいい。――けつしてそれは、陰に陽に活動しはじめていた、あの狂氣の仕業のみではないであろう。だがそれにしても、ヘルダーリーンは、內心なにを“den Fehl”と痛感したのであろうか。かつてゲーテがヘルダーリーンの作品にたいして抱いたあの不滿とまつたく異なるものであるとすれば、いかなる誤ちであろう。ゲーテがシラーから批判を求められたのは、いまだ一七九七年の夏のことであり、そのおりシラーがゲーテに送つたヘルダーリーンの作品二篇、すなわち“An den Äther”と“Der Wanderer”は、いまだ晩年のあのすばらしく純粹な光輝を毫も感知させぬ、いずれも過渡期の型にすぎなかつたのである。

詩人の名をはじめてひろく時人のあいだに高めたものは、いうまでもなく、一七九八年に完成されたロマン“Hyperion oder der Eremit in Griechenland”（一七九七年第一部、一七九九年第二部出版）である。この作品が、たんに樣式においてだけでなく、情緒的基調において、かのシュトイトリンの手に成る年刊詩集（一七九二、九三年度）に採錄された押韻讃歌の諸篇と格段に相違していることは、ヒューペーリオンが歌う“Schicksaalslied”一篇を取り出してみても、おのずから明らかであろう。だが、このロマンの執筆は、ヘルダーリーンと友人たちのあいだの往復書簡が示すように、すでに一七九二年、すなわち、かれのテュービンゲン時代に企圖されていた。いま僕らに“Hyperion”のいちはやき草稿として殘されているものは、アキレスを歌つた斷片

であるが、これを見れば、ディルタイの言う「人類の理想に寄せる讃歌」の諸篇とのあいだに、まだかなりの類似が認められるのである。いかにもヘルダーリーンは、一七九三年七月末、友人ノイファに宛てて、"Ich fand bald, dass meine Hymnen mir doch selten in dem Geschlechte, wo doch die Herzen schöner sind, ein Herz gewinnen werden, und diss bestärkte mich in meinem Entwurf eines griechischen Romans. Lass Deine edlen Freundinnen urteilen, aus dem Fragmente, das ich unsrem Stäudlin heute schike, ob mein Hyperion nicht vieleicht einmal ein Plätzchen ausfüllen dürfte, unter den Helden, die uns doch ein wenig besser unterhalten, als die wort- und abenteuerreichen Ritter. Besonders ist mir an dem Urteil der Person gelegen, die Du nicht nennst." と傳えているところからも分るように、さきの押韻讃歌によつて得たわずかな反響のうちにも、ことに女性の讀者たちに望みをつなぎながら、――かれは、ここに引用した手紙の最後からも察せられるように、そのころエリーゼ・ルブレと呼ばれる四つ年下の女性にせつない戀情を寄せていたのであるが、――いわば押韻讃歌につづく一篇として、ひとしくギリシャ的精神狀況のうちに、あらためて"Hyperion"を書きはじめたのである。しかし、そのころ、完成されたロマンのなかに見られるような構想をまつたく持たずに、筆を進めていたのでないことは、いわゆる"Das Thaliafragment"がすでに立證するところである。はやくも一七九三年に書かれたこの草稿においては、後の書簡形式がまぎれもなく確立されているのである。むろん、書簡形式のロマンは、今日のわれわれには考えられぬことかもしれぬ。しかしながら、十八世紀は、ヘルマン・グリムも言うように、書簡の氾濫した時代であつた。ロマンを書簡あるは日記の形式で書くことは、ゲーテの"Werther"やルソオの"La nouvelle Héloïse"その他が示すように、當時の文學のひとつの大きな傾向であり、ヘルダーリーンもそれらにきわめて強い影響を受けていることは、爭いがた

い事實である。しかしながら、ヘルダーリーンは、この書簡形式において、あたらしい生面を開拓した。かれの獨創性は、時間性のたくみな利用である。すなわち、かれの場合、すでに書簡が綴られるときは、事件のすべて終つたあとであり、主人公がとほく處を隔てながらも、心おきない相手にむかつて親しく、自身の抱いてきた理念や感情について共感を求めながら、すべてを回想と反省のうちに告白する點である。このような方法によれば、各書簡の傳えるさまざまな事件の順序と實際に過ぎ去つた過去の繼起とが、かならずしも時間的に一致する要がない。主人公は回想の翼にのつて、いつでも思いのままに、過去のある空間＝時間のなかへ直接入つてゆくことができるし、また過去が、自由に時間と空間を超絶して、現在のなかへ蘇つてくる。それゆえ、當時は、かつては在つたがいまはない過去、すなわちすでに片ずけられた過去ではなくて、現在とともに在る過去、現在によつて生きてくる過去である。あたかも無邪氣な幼兒がとりとめもなく現在と過去を混じて物語りながら、幼兒の腦裡には自己の經驗がありありと生きたイメージとなつて浮かんでいるように、讀者の心は、書簡の受取人ベラルミンと合一することによつて時間と空間を超絶し、主人公たる筆者ヒューペーリオンの過去を、「神話的現在」として、ありありと眼前に描き出すよう、誘われるのである。ヘルダーリーンは、こうして獨自な書簡形式の發見により、ロマンを成立せしめる重要な手がかりを摑んだわけであつた。

しかしながら、この "Das Thaliafragment" がロマンの完成のために築いた基礎は、たんに形式のみにとどまらなかつた。すでに前の年の秋にマーゲナウからノイファに送つた、ヘルダーリーンの友人間の通信によれば、"Holz schreibt wirklich an einem 2. Donamar, an Hyperion, der mir Vieles zu versprechen scheint. Er ist ein freiheitsliebender Held und ächter Grieche, voll kräftigen Principien, die ich vor mein Leben gern höre." と傳えているとおりに、この草稿では、はやくも主人公の性格がほぼ決定されているのである。

すなわち、十八世紀のギリシャ人であり、すばらしい回想の持主であり、たえず過去を思いしのびながら、いまはただ廢址のなかにのみ名殘りをとどめる往古の盛時を、すなわちおのが民族の輝やかしい幼年時代を、ふたたび現在に再現したいと願う“durstende Seele”であることは、後のロマンにおけるヒューペーリオンの性格とほとんどかわらぬ。いや、それだけではない。ヒューペーリオンは、孤獨と絶望の痛みに堪えかねて、眞理と“das Eine, das uns Ruhe giebt”を探しもとめながら、祖國をあとに放浪する。だが、心の故郷はどこにもない。かれは、ひそかに“Verbrüderung mit Menschen”においてこそふたたび“die Melodie unsers Herzens in den seeligen Tagen der Kindheit”が響きかえつてくるものと期待したのもむなしく、“Perlen wollt' ich kaufen von Bettlern, die ärmer waren, als ich, so arm, so begraben in ihr Elend, dass sie nicht wussten, wie arm sie waren, und sich recht wohl gefielen in den Lumpen, womit sie sich behangen hatten.”ということを悟つたのみで、心のかぎりない煉獄に喘ぎつずける。そして、ついに“himmlische Grazie”そのもののごとき女性メリーテのなかに、おのれの生命を救われるのである。このメリーテこそ、後のディオティーマの前身、というよりはむしろ、すでにこの段階において、ディオティーマそのものに等しかつた。いまだフランクフルト時代以前において、ズゼッテ・ゴンタート夫人の存在など夢にも知らぬはずの詩人が、はやくもメリーテのなかに——それがディオティーマとして完全に生き生きと具象化されるためには、あるいはエリーゼがズゼッテにかわるという現實的體驗を經なければならなかつたとしても、——ディオティーマの自然そのもののごとき滿ちたりた神々しい本質を、先取しているのである。たとえば、この斷片のなかの、ツアンテで誌されたという書簡の一節を見るがよい。“Aber was ich war, war ich durch sie. Die Gute freute sich über dem Lichte, das in mir leuchtete, und dachte nicht, dass es nur der Wiederschein des ihrigen

war. Ich fühlte nur zu bald, dass ich ärmer wurde, als ein Schatten, wenn sie nicht in mir, und um mich, und für mich lebte, wenn sie nicht mein ward; dass ich zu nichts ward, wenn sie sich mir entzog. Es konnte nicht anders kommen, ich musste mit dieser Todesangst jede Miene, und jeden Laut von ihr befragen, ihrem Auge folgen, als wollte mir mein Leben entfliehen, es mochte gen Himmel sich wenden, oder zur Erde; o Gott! es musste ja ein Todesbote für mich seyn, jedes Lächeln ihres heiligen Friedens, jedes ihrer Himmelsworte, das mir sagte, wie ihr an ihrem, ihrem Herzen genüge: Sie musste ja über mich kommen, diese Verzweiflung, dass das Herrliche, was ich liebte, so herrlich war, dass es mein nicht bedurfte.” しかもなお驚くべきことに、メリーテもまた、ディオティーマとひとしく、ヒュペーリオンの眼前からはかなく姿を消すばかりか、介在する自身を消すことによつて、ヒュペーリオンを自然に直接對面させつつ、かの女自身のかわりに、自然への大きな愛を、かれに與えるのである。それにしてもこうして、“Das Thaliafragment” のなかにはすでにアダマスやノターラまでも名まえを列ねていながら、ロマンの完成までに、かれはなぜ五年という長い年月を費さねばならなかつたのであろうか。僕はここでしばらくかれの幼年時代に話を戻そうとおもう。

ヘルダーリーンにとつては、世に在ることが、すでに取返しようもない悲劇であつた。かれはネッカー河畔ラウフェンに生まれた。かれの父は、新教を奉じ、宗務廳のために、かつてのベネディクト派の僧院がその地に殘してあつた寺領を管理していたが、かれの生後二年すなわち一七七二年に、はやくも思いがけぬ死のためにあの世へ去つた。そのはげしい衝撃があつて間なしに、かれの妹ハインリケが生まれた。いたいけなふたつの生命と、

やはりおなじ年に夫を失つた里方の祖母とを抱えて、かれの母ヨハンナ・クリスティアーネは、いかばかり苦勞を重ねたことだろう。母は、しかし緣あつて、それから二年後に、ネッカー河畔ニュルティンゲンに嫁した。そして、この小都市の市長を勤める第二の父ゴックの隔てない愛にまもられながら、父なきふたりの子供にも、ふたたび幸福な月日が訪れるようになつたが、それもほんの束の間にすぎなかつた。運命は、かれが九歲のときに、かれの第二の父をも容赦なく奪い去つてしまつた。第二の父の忘れ形見カールを加えて、いまは幼いみたりの遺兒が、老若ふたりの女性のかぼそい養育の手に委ねられたのである。母は、そのとき、まだ三十歲に達してもいなかつた。だが、もはや他に寄りつく先のない家庭の運命は、そのままニュルティンゲンにとどまつて、この若い寡婦を中心にみながかたく結ばれながら生きてゆくより道のないことを、しだいに教えたのである。ヘルダーリーンが、母に宛てた、あるいは妹や義弟に寄せた手紙を讀めば、たれしも、そこに終始かわらぬ誠實な心遣いがあふれていることを感じるにちがいない。かれの母が、いかに心やさしく、ふかい慈悲の女性であつたかは、次の手紙の一節 "Wäre sie auch nicht unsere Mutter, und widerführe diese Güte nicht mir, ich müsste doch ewig mich freuen, dass eine solche Seele auf Erden ist." (An den Bruder. Jena, den 13. April 1795) からも察することができよう。かの女は、けつして高い知性の持主ではなかつたが、崇高な信仰によつて自己を律すること、ことのほか嚴しく、つねに神にたいする謙虛な義務感にみたされていた。僕らは、そこに、一家の傳統と、一家を支配する敬虔主義——現世を神の掟に反した罪の世界となし、世界との出會をおのれの試煉と觀じながら、彼岸を求めて靜謐のうちにつつましく內面的省察を深める、正統な敬虔主義——のつよい傾向を認めることができる。そうした家庭の空氣は、かれの十六歲のときの作と傳えられる、"Die Meinige" と題した言葉つたない詩の次の三節からも窺われよう。

Meine Mutter! —— o mit Freudentränen
Dank' ich großer Geber, Lieber Vater! dir,
Mir o mir dem glüklichsten von tausend andern Söhnen
Ach die beste Mutter gabst du mir.
Gott! ich falle nieder mit Entzüken,
Welches ewig keine Menschenlippe spricht
Tränend kan ich aus dem Staube zu dir bliken —
Nimm es an das Opfer! mehr vermag ich nicht! —

Ach als einst in unsre stille Hütte
Furchtbarer! herab dein Todesengel kam,
Und den jammernden, den flehenden aus ihrer Mitte
Ewigteurer Vater! dich uns nahm;
Als am schröklich stillen Sterbebette
Meine Mutter sinnlos in dem Staube lag —
Wehe! noch erblik ich sie, die Jammerstätte,
Ewig schwebt vor mir der schwarze Sterbetag —

Ach da warf ich mich zur Mutter nieder,

Heischerschluchzend blikte ich an ihr hinauf;
Plözlich bebt' ein heliger Schauer durch des Knaben Glieder,
Kindlich sprach ich — *Lasten legt er auf,*
Aber o er hilft ja auch, der gute —
Hilft ja auch der gute, liebevolle Gott — —
Amen! amen! noch erkenn ichs! deine Ruthe
Schlägt väterlich! du hilfst in aller Noth!

うたがいもなく、このまつとうな敬虔主義的信仰こそ、一家が苦難をのりきつてゆく、陰の大きな原動力であつた。しかしながら、かれが、デンケンドルフ僧院學校をふりだしに、聖職への道に入つたことは、かならずしもかかる信仰のゆえではなかつた。父方においても、また母方においても、祖先のなかに聖職を奉じた者をあまた出しているこの家庭にあつては、聖職に就くよりほかに、——しかも聖職が、ひろく當時にあつては、學者の最高の形式として認められていた以上、——父祖にたいする務めは、考えられなかつたにちがいない。實際にまた、背景や資力のさしてゆたかでない者らにとつては、學費のかからぬこの一筋道を歩むよりほかに、立身のすべはなかつたのである。長子ヘルダーリーンの人生行路は、それゆえに、かれ自身が好むと好まざるとにかかわらず、すでに父亡きあとの家庭事情によつて豫定されていた。かれは、現在に苦しむ母が未來に描く夢にほかならなかつた。

かような不幸な境遇のさなかにも、かれの幼年時代は、かれにとつて、このうえなく平和な年月であつた。

精神は、いまだにひとつ分裂を知らず、甘美なまどろみにつつまれて、日々はなごやかに過ぎ去つた。この過去の想い出が、いかにしばしばかれの各時代の作品のなかに、その外面的な傳記的色彩を洗いおとされ、あらゆる生命に受賞する内面的な生成過程として、うつくしく歌われていることか。それは詩においてだけではない。"Hyperion" 第一部は、次のように、傳えている。

"Ruhe der Kindheit! himmlische Ruhe! wie oft steh' ich still vor dir in liebender Betrachtung, und möchte dich denken! Aber wir haben ja nur Begriffe von dem, was einmal schlecht gewesen und wieder gut gemacht ist; von Kindheit, Unschuld haben wir keine Begriffe.

Da ich noch ein stilles Kind war und von dem allem, was uns umgiebt. nichts wusste, war ich da nicht mehr, als jezt, nach all den Mühen des Herzens und all dem Sinnen und Ringen?

Ja, ein göttlich Wesen ist das Kind, so lang es nicht in die Chamäleonsfarbe der Menschen getaucht ist.

Es ist ganz, was es ist, und darum ist es so schön.

Der Zwang des Gesezes und des Schiksaals betastet es nicht; im Kind ist Freiheit allein.

In ihm ist Frieden; es ist noch mit sich selber nicht zerfallen. Reichtum ist in ihm; es kennt sein Herz, die Dürftigkeit des Lebens nicht. Es ist unsterblich, denn es weiss vom Tode nichts."

たとえようもなく靜謐な、ふかい、純一な生命のみなぎり、"Einfalt" (Germanien) そのものにひとしい幼年の生活は、すでに滿ち足りた黄金時代の輝やかしい實現ともいうべく、かれの將來にゆるぎない基準 "Maß" となるのである。ヘルダーリーンの柔弱な性格、かれみずからも名付けている、かれの "eine wächserne

Weichheit"（An Immanuel Nast. Kl. Maulbronn d...Jan. 87）は、やさしい女手ばかりでいたわり育てられた、かれの境遇のせいのみではけつしてない。ベッティーナ・フォン・アルニムは、ヘルダーリーンの後半生を闇のなかに沈めた狂氣をもつて、かれの偉大さの證左とし、"Und glauben Sie, dass Hölderlins ganzer Wahnsinn aus einer zu feinen Organisation entstanden, wie der indische Vogel in einer Blume ausgebrütet, so ist seine Seele, und nun ist es die härteste rauhe Kalkwand, die ihn umgibt, wo man ihn mit den Uhus zusammensperrt, wie soll er da wieder gesund werden."（Die Günderode）と語つているが、たしかにヘルダーリーンは"eine zu feine Organisation"だつたにちがいない。かれは、一點の曇りもない、神々しいまでに暗れやかな魂の持主であつたが、あまりにも純粹に生まれついていたためか、その魂には殼がなかつた。すなわち、かれの魂には、世の人々に見られるような、自他のあいだを遮斷して內部を大切に護つてゆく地上的な殼が、生まれながらに與えられていなかつたのである。それゆえ、かれの無垢な魂は、內部と外部のあいだの隔壁を缺いでいるために、つねに外部にむかつて開放され、あたかも澄みきつた鏡が、とめどなくおのれの面からながれ出る淨らかなひかりを、また元どおりおのれのなかへ立ち歸らせるように、あらゆるものを隔てなく直接ありのままに受け入れるのである。かれの人間構造がことのほか纖細に見えたのも、そのためであつた。この缺陷こそ、かれの幼年時代にあつては、何人も味わいしらぬ無上の幸福にほかならなかつた。かれのつねに開かれた魂は、家庭という愛の殼にやすらかにまもられて、自由に息づきながら、神を身近かに感じ、戶外に出ては、さんさんと降りそそぐ瀛氣のしたで、微塵の障礙もなく、純朴なシュヴァーベンのうつくしい自然のなかへ、無限に融けこむことができたからである。萬象とひとつになる、それこそ神の生活であり、生命の天國である。あるいは花々に抱かれ、あるいは森野をわたるそよ風の得も言われぬ佳音に育てられて、かれ

が幼年時代に味わつた魂の歡喜は、まさしく永遠であつた。かくして、萬物融和の幼年時代は、のちにいたり、現實の形容しがたい冷さにいやがうえにも虐げられるヘルダーリーンにとつて、

Zwar gehn wir fast, wie die Waisen;
Wohl ists, wie sonst, nur jene Pflege nicht wieder;
Doch Jünglinge, der Kindheit gedenk,
Im Haußе sind auch diese nicht fremde.

(Am Quell der Donau)

と歌われているように、魂の永遠の故郷となり、失われた幼年時代への郷愁は、ついに人類の幼年時代にたいするはるかな憧憬とかわるのである。

"Aber das können die Menschen nicht leiden. Das Göttliche muss werden, wie ihrer einer, muss erfahren, dass sie auch da sind, und eh' es die Natur aus seinem Paradiese treibt, so schmeicheln und schleppen die Menschen es heraus, auf das Feld des Fluchs, dass es, wie sie, im Schweisse des Angesichts sich abarbeite." (Hyperion)

デンケンドルフ僧院學校への入學は、ヘルダーリーンにとつて、人間世界すなわち現實のはじまりであり、天國からの思いもかけぬ墜落であつた。魂が殼を持たずに、すつかり開放されていれば、抵抗する備えを持たず、まつたくの無防備である。そのような魂が、いきなり人々のあいだへ、投げ出されるならば、はやそれだけでも悲

劇であろう。人々のかたい殻に傷つき、血みどろとなりながらも、むきだしの魂は、なんら抵抗するすべを知らないからである。こうして、かれの無垢な魂を、現實が四方から、容赦ない迫害者となつて、ひききれなしに苛むのであつた。現在残されている最も古いかれの書簡といえば、かれがニュルティンゲン時代に學問の手ほどきを受けた助祭ケストリンに宛てて、デンケンドルフから一七八五年に送つたものであるが、かれはそのなかでこうした事情を次のように報じている。"Es ist wahr, ich glaubte, jezt wäre ich der rechte Christ, alles war in mir Vergnügen, und insonderheit die Natur machte in solchen Augenbliken (dann viel länger dauerte dieses Vergnügen selten) einen auserordentlich lebhafften Eindruck auf mein Herz; aber ich konnte niemand um mich leiden, wollte nur immer einsam seyn, und schien gleichsam die Menschheit zu verachten; und der kleinste Umstand jagt mein Herz aus sich selbst heraus und dann wurde ich nur desto leichtsinniger. Wollte ich klug seyn, so wurde mein Herz tückisch, und die kleinste Beleidigung schien es zu überzeugen, wie die Menschen so sehr böse, so teuflisch seyen, und wie man sich vor ihnen vorsehen, wie man die geringste Vertraulichkeit mit ihnen meiden müsse."どつに悲痛な訴えと言わねばならぬ。少年の若々しい魂がそのときいかばかり堪えがたい恐怖にさらされていたか、餘人にはおそらく想像しきれまい。魂に殻をかぶつている常人には、永久に閉ざされた體驗だからである。もとより、かれの無抵抗な魂の受難は、けつしてデンケンドルフ時代のみで終りはしない。それは、次々に、マウルブロン時代を經て、全生涯にもつずくであろう。さきのイマヌエル・ナストに宛てた書簡のなかでも、"Ich will Dir sagen, ich habe einen Ansatz von meinen Knabenjahren — von meinen damaligen Herzen — und der ist mir noch der liebste — das war so eine wächserne Weichheit, und darin ist der Grund, dass ich in gewissen

Launen ob allem weinen kan — aber eben dieser Teil meines Herzens wurde am ärgsten mishandelt, so lang ich im Kloster bin." と、洩らしているが、僕らは、かれの「僧院にいるかぎり」の言葉を、「世にあるかぎり」と改めねばならないわけである。しかも悲劇は、こうした禀質的な問題のうえに、さらに外的な特殊事情が重なつて、かれの魂に途方もない責苦を加えるのである。

敬虔主義が、宗教生活の正教的な硬直につよく反對し、新しい信仰形式をもとめて、ルーテル派のなかから擡頭したものであり、さまざまのゆるぎない教義に縛られることなく、聖書の有する生きた價値にたいする再認識を各人の聖書解釋のなかに期待しながら、各人の內面生活を尊重することによつて、新しい日常信仰の生き生きとした態度を信徒たちのあいだに作りあげようと意圖したものであることは、さきにも述べたとおりである。しかしながらその敬虔主義も、誕生以來おおくの歲月を閱してからは、しだいに本來の新鮮な意義と活氣を喪失し、ところによつてはすでに頑固な化石狀態を示しはじめていたのである。すなわち、かつての各自の內面生活を重んじた面はまつたく見受けられぬようになり、あまつさえ歪められた禁欲主義的樣相をすらも帶びるようになつて、これまで方法として利用されていたにすぎぬもの、たとえば共同の聖書講讀とか、懺悔競爭とか、いわゆる恩寵の道とか、信仰喚起とかを、必須の義務として、强要するにいたつたのである。ことにこのデンケンドルフ僧院學校においては、ヴュルテムベルク州の生んだ代表的敬虔主義者であり、かつ熱烈な千年期說 Chiliasmus の信奉者でもあつた釋義學者ヨハン・アルブレヒト・ベンゲルが、かつて三十年ちかくも、教鞭を執つていたことがあるにもかかわらず、その後四十年間に空氣はまつたく沈滯して、ヘルダーリーンが入學したころは、無味乾燥な權威と反自然の冷たい掟が支配している、硬直した形式の世界にすぎなかつた。かれがニュルティンゲンの家庭で味わつたような生き生きとした敬虔は、微塵も感じられなかつた。神は自然と生命から最も遠い神であ

り、神の家は、思ひもかけず、かれにとつては、抜きさしならぬ牢獄にほかならなかつたのである。それは、一七八六年、マウルブロンの上級僧院學校へ進んでからも、嚴重な日課のあいだにわずかな餘暇が殖えただけで、一日一日がやはり涙の海であり、不味いスープ食のなかへも涙の滴がしたたりおちる、いわば "Klosterkreuz" (An die Mutter. Maulbronn etwa im Sommer 1787) であることに、すこしもかわりはなかつた。かれは、いまだ自分のものでない言語を用いながらも、かなしく歌つている。

Tränen, fließt! o fließet, Mitleidstränen,
Taumel, Reue, Tugend, Spott der Welt,
Wiederkehr zu ihr, ein neues Sehnen,
Banges Seufzen, das die Leiden zählt,
Sind der armen Sterblichen Begleiter,
O, nur allzu wenig heiter!

Banger Schauer faßt die trübe Seele,
Wenn sie jene Thorenfreuden sieht,
Welt, Verführung, manches Guten Hölle,
Flieht von mir, auf ewig immer flieht!
Ja gewiß, schon manche gute Seele hat, betrogen,

Euer tödtend Gifft gesogen.

(Das Menschliche Leben. Im December 1785)

いまは、生きとし生けるものすべてとの融和も、はかない想い出と去つて、ときおり與えられるわずかの暇に自然から慰められるほかは、冷酷無慈悲な形式のなかで、たえず怯えながら凍えつずけねばならない。かれは、沈鬱な孤獨に驅られて、せつなく母の愛の救いにすがり、あるいは露わな無抵抗の魂をまもるために、友情のかたい殼を求める。テュービンゲンで識りあい晩年の果までもつずいたかのイザーク・ジンクレヤーの友愛にいたるまで、かれは、現實に生きてゆくためには、つねにこうした依存が宿命的に必要だつたのである。詩のなかではステラと呼ばれているルイーゼ・ナストへのしばしの愛情も、かかるやるせない欲求のあらわれにほかならぬ。かのレオンベルクに住む書記イマヌエル・ナストにむかつて切々と書き送る手紙のかずかずは、そのままに、かれの虐げられた魂の記録である。"Denn sag mir, Freund, warum soll ich mir um meine beste Absichten Pallisaden sezen, meine unschuldigsten Handlungen für Verbrechen auslegen lassen — dass es doch so schlechte Menschen giebt, unter meinen Cameraden so elende Kerls — wann mich die Freundschaft nicht zuweilen wieder gut machte — — so hätt ich mich manchmal schon lieber an iedem andern Ort gewünscht, als unter Menschengeselschaften — Sieh lieber nicht Eigenliebe und übertriebene Empfindlichkeit ists, was mich so wütend machte."(Maulbronn etwa im Februar 1787) こうして、かれは、絶えざる不安と脅迫のために、いやがうえにも過敏となり、ついには"gefährlich melancholisch"(An Immanuel Nast. Maulbronn im Herbst 1787) なる狀態にまでも陷つて、現實のなかに得られぬものを空想のなかに追求

めながら、靜謐な彼岸へのはげしい憧憬に襲われる。もはや現實と空想、此岸と彼岸のあいだの區別さえもつかなくなり、かれの生命は、"ruhig", "heiter", "traulich", "vergnügt", "zärtlich", "treu", "fromm" なる極と "wehmütig" "trübe", "mürrisch", "mißmutig", "dumm", "indolent" なる極とのあいだを休みなく往來して、はてしない干滿を繰りかえしながら、"der ewige, ewige Grillenfänger" (An Immanuel Nast. Maulbronn nach Pfingten 1787) と化して、醫しがたい分裂に喘ぐのである。かれの當時の詩作が、かの "der grosse Messiassänger" (An Immanuel Nast. Maulbronn D. 18. FEBR. 87) の影響をぬきにしては到底考えられず、その目ざすところも "Klopstoksgröße" (Mein Vorsaz) にほかならなかつたとしても、なんら獨自なものをしめしておらず、オシアンとか、ヤング、ゲッティンゲン詩人同盟、鄕土詩人たち、あるいはマティソンなどのきわめて矛盾した模倣にすぎなかつたのも、當然である。かれは、詩を作るよりさきに、まず生きねばならなかつた。自己の宿命的な缺陷をいかにして補い、いかにして現實を生きぬくか、すなわち人間としての生きかたが、まず解決されねばならぬ重大問題だつたのである。その意味において、文學は、かれがつねに愛した吹笛とおなじように、あるいはまたクロプシュトックの "Messias" の繙讀とか "Der Zürchersee" を中心とするさまざまな頌歌への傾倒、あるいはシラーの "Fiesko", "Kabale und Liebe", "Die Räuber", "Don Carlos" などに寄せる感激とおなじように、いわば魂の慰め、鬱憤のはけ口にすぎなかつた。それにしても、かれが、かかる受難のさなかにあつて、毫も純眞さを損うことなく、なお誠實に學業を勵んでいたことは、まつたく驚歎に値する。たとえ、かれの大きな責任感が、母の純粹な敬虔主義的薫陶によるものであつたとしても。

ただこの時代の若い作品について注目すべきことは、聖書を唯一の據りどころとして生きた信仰を唱道したべ

ンゲルの流れ――それはむしろ僧院學校のような圍いをもつた施設のなかでなく、一般民衆のあいだにいまだ現存していたのであるが――を汲む、自然と恩寵の牧師クリストフ・フリードリヒ・エーティンガーの一派の詩人フィリプ・フリードリヒ・ヒラーの影響であろう。もとよりヘルダーリーンがマウルブロンに進學したときは、とつくにヒラーは他界しており、マウルブロン僧院學校ではすでにヒラーの息子が教師に着任していたのであるが、ローター・ケムプターも指摘しているように、若きヘルダーリーンが聖書から好んで詩的表現を取つているが、點において、ヒラーとの一致を認めることができるのである。たとえば、"Bin ich gleich vor dir, ein Wurm, ein Sünder —" (Die Meinige); "o so ende,/Jammerstand!" (Schwärmerei); "deine Gnade/Führte durch so manches rauhe Distelnfeld,/Durch so manche dunkle Dornenpfade —". (Die Meinige); "O so reiße ihn aus dem Getümmel" (Die Stille); "Aus der Welt, wo tolle Thoren spotten,/Um leere Schattenbilder sich bemühn," (Die Nacht); "Du sahst noch nicht, wie tolle Thoren neidisch gafften,/Wann sie die Tugend sehen blühn.//Dich sucht noch nicht des kühnen Lästrers Zunge;/Erst labt sie, doch ihr Schlangengifft/Verwandelt bald das Lob...." (An M. B.) その他の用語は、そのままヒラーの作のなかにも、發見することができる。しかしながら、それは偶然の一致であり、牧師ヒラーもまたデンケンドルフ、マウルブロン、さらにはテュービンゲンと、ヘルダーリーンとおなじ學歴をさきに辿つていた事實から考え合しても、僧院學校にあるヘルダーリーンが日夜そうした言句を口にしやすいのは當然でないかと、反論されるかもしれない。ところがヘルダーリーンは、ヒラーとひとしく、かような表現を藉りて、世のあらゆる"Schande"を呪い、彼岸の靜謐を渴仰しながら、此岸における地獄圖が審判とともに終りを告げ、此岸において彼岸的樂園が實現することを、熱烈に期待した。僕らはそこに、ヒラーと共通する、當時の特異な敬虔主義的思潮を、すな

わち終末論 Eschatologie 的傾向を、はつきり看取することができよう。しかもこの終末論的傾向が、ヘルダーリーンの晩年にいたるまで一貫し、作品を成立せしめるための、時とともにますます重要な根本動機となつてゆくことを思えば、かれの初期の抒情詩の意義も再認識されねばならぬのである。ヘルダーリーンは、はやくも僧院學校に閉じこめられながら、ヒラーのごとき窓をとおして時代の流れを知り、時代の動きを鋭敏に感じていたと言えよう。ところで、若きヘルダーリーンは、世のあらゆる汚辱を一掃するために、いかなる道を見出していたか。かれの目ざす敵は、まず "Despotenblut" (Die Demuth), "ein tyrannisch Joch" (Der Kampf der Le'denschaft) であり、そして "Kleinere Wütriche", "Pfaffen" (Die Ehrsucht) であり、さらには "das verderbliche Ausland" "verdorbene Affen des Auslands" (Am Tage der Feundschaftsfeier) にほかならなかつた。そして、孤獨のかれが、輝やかしい鄉土の歷史を想い起しつつ、自由をもとめて "den schönen, seeligen, ewigen Bund" を說くのである (Am Tage der Freundschaftsfeier)。僕らは、かの "Gedicht an Herzogin Francisca" のなかでヘルダーリーンが "du Menschenfeind" と呼んでいる相手の人物を想像するとき、かれがぶちまけた大膽な怒りの激しさに慄然たらざるを得ない。もはやここにいたつては、ヒラーひとりの影響の爲せるわざとは斷じられないかもしれぬ。すでにシュヴァーベンにおいては、そのころ、地方的な愛國文學が擡頭しはじめていた。これを促したるものは、まずなによりも、スイスに近いという、この地方の地理的條件であろう。すなわち、いまだ多分に封建的缺陷を殘存していたとはいえ、はるかに進步していたスイスの社會事情が、近くこの地方に住む詩人たちに、自國の現狀をあらためて認識せしめるとともに、かれらの自由への渴仰をつよく刺戟したのである。それゆえかれらの文學は、たんなる鄉土文學のように、鄉土の山水にたいする讃美とか、自分たち種族が戰つてきた歷史にたいする誇り、過去の偉大な業績にたいする追慕、中世社會にたい

する回顧のみに終らなかつた。カール・オイゲン公が強大な專制をしいているヴュルテムベルク、そしてそれをとりまくあまたの弱體な都市國家が、かれら詩人たちの痛罵と抗爭の的だつたのである。だが、はたして物靜かな小都市の僧院に籠つているヘルダーリーンが、だれかの案内なしに、こうした動きに直接ふれていたかどうか、きわめて疑問である。むろん、テュービンゲン時代には、はげしくこの渦中に巻きこまれた——というよりは、この動きに呼應した——ことが明白であるけれども。あるいはシラーの戲曲ことに "Die Räuber" などの影響が、すでにこのあたりにはたらいているのかもしれない。いずれにせよ、僕らは、すくなくとも詩的表現の面において、ヒラーの影響を否定できないであろう。ヒラーの歌うところは、いわゆる宗教歌の域を出ず、その點ヘルダーリーンの作品とはますます本質的に隔たつてゆくのであるが、しかし、かれは、詩作にあたつて、つねに素朴を旨とした。殊更に特異な難解な表現は、かれの好むところでなかつた。かれは、ひろく人々のあいだに共有財として通用していながら、しかもけつして卑俗化していない言葉を選び、その選りぬきの語彙を飽くことなく繰り返して、自己の敬虔な心情を歌のなかにできうるかぎり吐露しようと努めた。かれが聖書からかずかずの表現を藉りたのも、じつはそのためであつた。こうしたヒラーの詩的根本態度がそのままにヘルダーリーンのそれであることは、言うまでもない。しかもそれは、のちにまたクロプシュトックが民族の詩人としてふたたびかれの意識につよく蘇つてくるにいたつて、ますます明確さを示してくる。かれが晩年の悲歌や讃歌において驅使した詩的愛用語のほとんどすべてが、すでにこの僧院學校時代（1784-1788）の若い作品のなかに見出されるのも、故なきことではない。

しかしながら、神に最も近いはずの生活が神から最も遠かつたという、途方もない幻滅の悲しみは、給與される食事の不味さも手傳つて、若きヘルダーリーンの心に新たな變化をもたらさずにはおかなかつた。かれは、マ

ウルブロンに進學してより約半年後、母への手紙のなかで、次のように語つている。"Liebste Mama! Sie können mirs jezt gewiss glauben — dass mir, ausser in einem ganz ausserordentlichen Fall, wo mein Glük augenscheinlich besser gemacht wäre — dass mir nie mehr der Gedanke kommen wird aus meinem Stand zu tretten — Ich sehe jezt! man kan als Dorfpfarrer der Welt so nüzlich, man kann noch glükicher sein, als wenn man, weis nicht was? wäre."(Maulbronn im Frühjahr 1787). これを見れば、かれが、聖職への道を放棄したいという願いを母のところへ申出で、母から懇々と諭されて、考えなおしたことは、明らかである。しかし、この願いは、むろん、かれの一時の氣まぐれではなかつた。形容しがたい苦しみに明け暮れる日々のために、心をずたずたに破られたかれが、ついに救いを求める、必死の叫びにほかならなかつた。かれがイマヌエル・ナストに送つた次の手紙の一節は、それを立證している。"Hier halt' ichs nimmer aus! nein warlich! Ich muss fort — ich habe <mir> vest vorgenommen, entweder meiner Mutter morgen zu schreiben — dass sie mich gar aus dem Kloster nimmt, oder den Prälaten um eine Curzeit von etlich Monathen zu bitten, weil ich öfters Blut auswerfe."(Maulbronn wol im Sommer 1787). だが、いかに慈愛ぶかい母も、この申出に關するかぎりは、けつしてかれの救いの島とはならなかつた。こうして、かれの必死の願いは、その都度母のきびしい拒否に逢つて、むなしくかれの内部に根ざしてゆくほかなかつた。しかし、その結ばれた鬱憤は、かれの勉學態度に大きな變化を與えずにはおかなかつた。神學研究にたいする興味がしだいに失はれたことは、言うまでもない。とともに、ギリシャ語、ラテン語への傾倒は、ますます積極的に熱を帶び、かれの心は、とおく古典世界、ことにホーマーやプラトーを出したギリシャにはげしく惹かれていくのである。僕らは、キリスト教的信仰につよく支配されているマウルブロン時代の作品において、はやくもこのア

Ists heißer Durst nach Männervollkommenheit?
Ists leises Geizen um Hekatombenlohn?
Ists schwacher Schwung nach Pindars Flug? ists
Kämpfendes Streben nach Klopstoksgröße?
(Mein Vorsaz)

からも親はれるように、古代がしだいに混じはじめているのを、知るのである。それはたんに學課として課せられた兩國語の故のみではない。かくして、キリスト教におかれていたかれの精神的重點が、これより年月を重ねるにつれて、古代ギリシャのほうへ移つてゆくのである。かと言つて、かれは、ふつう言われるように、けつしてキリスト教から離反したのではなかつた。かれが、晩年にみずからの一生を回顧して、

Viel hab' ich dein
Und deines Sohnes wegen
Gelitten, o Madonna,
Seit ich gehöret von ihm
In süßer Jugend;
Denn nicht der Seher allein

Es stehen unter einem Schiksaal
Die Dienenden auch. Denn weil ich

Und manchen Gesang, den ich
Dem höchsten zu singen, dem Vater
Gesonnen war, den hat
Mir weggezehret die Schwermuth.

（An die Madonna）

と歌つているように、かれの念頭からはキリストやマリアは片時も去つたことがないのである。僕らはむしろこの點について、敬虔主義的信仰に驅られるままに、かれをとりまく現實のなかでは得られなかつた――しかも敬虔主義によつて存在を感じさせられた――自然と生命に最も近い神を、かれは、古代世界のなかに求めたと、考えるべきであろう。だからこそ、いかにギリシャを渇仰する作品においても、またところどころにキリスト教的表現が混じるのである。

（未完）

【お斷り】締切ちかくになつて急に執筆することになつたために、年とともに遲筆となつた僕は、せめて“Hyperion”にまでも論をすすめることすらできないままで、ついに打切らざるを得なかつた。これでは僕が頭のなかで考えていたことの三分の一にも足りないばかりか、この表題のもとにヘルダーリーンのロゴス觀へまでも立入つてみたいという僕のいささかながらも獨自な意圖は、ほとんど讀者の方々に分つて頂けないと思う。殘念ながら今後の機會を待つより仕方がない。あえて御諒承を乞う次第である。